



第 2 7 号
 発 行
 小松同窓会本部
 〒923-8646
 小松市丸内町二ノ丸15
 石川県立小松高等学校内
 同窓会報編集委員会
 TEL・FAX (0761)21-6330
 印刷 マルト印刷工業株式会社

小松高校大規模改築二期工事 「管理教室棟」が完成

事務長 石江 政信

小松高校大規模改築工事は、平成12年度に6カ年計画で着手しました。平成12、13年度の第1期工事では「特別教室棟・講堂棟・自転車置場」等が完成し、平成14年から使用しております。

第1期工事に引き続き、平成14年10月に第2期工事「管理教室棟」(4階建)の建設に着手し、平成15年12月にほぼ完成しました。平成16年2月初旬に移動できないか検討しております。

管理教室棟は、1階部分に校長室、事務室、保健室、進路指導室、教育相談室等の管理関係諸室を配し、普通教室は2階から4階に配置、職員室は生徒が気軽に立ち寄れるよう2階に配置しました。普通教室は全室南面採光とし、北側の廊下にはベンチ、手洗場が設けてあります。3階には理科講義室が設けられており、入り口には明治講堂の正面にあつた木製の門が移設されておりますので、ご来校の折には、是非一度足を運びいただきたいと思います。きつと昔の学園生活を懐かしく思い出されたいと思います。



完成した第2期工事「管理教室棟」正面

に配慮がされております。今後の工事計画は、平成16年7月頃から現教室棟を解体し、その跡地に10月頃から第3期工事で、「生活学習センター1棟(仮称・3階建)の建設

多目的講義室、学習室などを配置、3階には視聴覚室(兼集会室)、情報処理室、生徒会室、購買室などが配置されます。1階中庭部分「水の広場」(仮称)では、遊水池の周りで多くの生徒が、明るく・楽しく語り合う姿が見られることと見えています。

管理教室棟と特別教室棟を結ぶ幹線渡り廊下(幅員4.5メートル)の2階、3階の中間には「エントランス」が設けられ、また3階、4階にもゆとりある「エントランス」が確保されており、本校卒業OBの絵画や陶芸品などを中心に展示し、在校生に日頃から美術品に慣れ親しんでもらうことにしています。

生活学習センター棟の完成は平成17年末の予定で、その後現図書館棟、集会場(明治講堂)、トレーラック場、仮設生徒玄関・渡り廊下等を取り壊し、ふれあい広場(仮称)、美術広場(仮称)、駐車場等の整備工事を植栽・修景施設工事を施工。平成18年3月末には3期6カ年の長きにわたる全ての改築工事が終了し、学校周辺の住宅環境ともマッチした品格ある校舎棟、南側正門から小松城址「天守台」に至る散策路や地域に開かれた生活学習センターを有する「新小松高等学校」がその全貌を現わします。

また、バリアフリーに対応するため、エレベーター・障害者用トイレの設置、車いす用玄関スロープなど段差の解消等

に着手する予定になっております。生活学習センター棟は、1階には生徒玄関、2階には図書室、



松校カミングデイに
参加して

清丸 亮一

平成十五年九月二十八日、同窓会本部のお世話で、第三回ホームスクールカミングデイが開催されたのだが、年末にこのことについて「天守台」に寄稿して欲しいとの依頼を受けた。でも何で文才の無い私が……。こんななら前もって書いてくれればええのに。何を書いていいものか、はたと困って

しまった。でもこんな愚痴を言うとして、もしようがないので当日の講義の感想や様子などを書き並べて報告としたい。

さて、創立百周年を記念して記念館（現役の頃は牧舎本館）に階段教室が整備された。そこが今回の会場である。玄関階段の石の磨り減り具合がなんとも懐かしく昔を思い出しながら入館した。授業は九時三十分開始であるが、始業までの間、懐かしい友達と積もる話に花を咲かせつつ館内を見てまわる。歴史を物語る写真・資料等の展示を見、また収蔵されている美術品、特に今回は円地信二先生の個展が開催されており、しばし美の鑑賞に浸った。時間も過ぎて、かつての昔、停電時か何かで数回聞いたことのある鐘（振鈴）が鳴った。いよいよ授業の開始である。

第一限特別授業

講師 建部守栄 先生

予定されていた演題は、「今我

が家の歴史を書き上げよう」ということであったが、先生の小松高校との出会い、そして二度目そして三度目のお勤め等の本校との関わりについてのイントロの後、用意した演題もあつたのだが、今小松高校は大規模改築工事の真っ最中である。よって、学校の施設建物を中心とした回顧物語をしたいということ、用意されていた周年ごとに発刊された会員名簿の閉じこみの校舎写真のコピーを中心と、あの当時はここはこうだったとか、ああだったとかのお話が続く。思えば私たち十四期卒業生は、入学が昭和三十四年四月であり、その年は確か創立六十周年だったと記憶している。そして一階に視聴覚教室を兼ねた記念図書館が建設されたことを思い出す。先生の用意された写真の一番古いもの（先生の注には、七十年会員簿、昭和四四年十月とある）が私たちの高校生活に一番近い写真なんだなと思つてよく見ると、この写真には、旧校舎の木造校舎（今の記念館）が残っていることを考えると、昭和三十五年頃の写真

ではないかと思つた。私たちの三年生当時は、新校舎（現校舎）建設で、中庭のところどころでコンクリートのパイル打ちの真っ最中で、大変騒々しかったこと、そして卒業後に今の校舎が開校された事を考えると辻褄が合う。この写真が一番身近に感じた。本当に懐かしい。よく見れば、二八番教室、二九番教室そして三十番教室がよくわかる。昔は武道場であつたと聞いた教室、美術教室を兼ねたあの教室、それは私の卒業時のホーム教室だった。ホーム教室といっても、それは名ばかりで、授業はクラスメイトが揃つて受けたことがなく、唯、昼食時には戻つてきて、昼飯を食らつた場所。それも後ろのド



建部先生

アを開ければすぐ運動場だから晴天なら屋外で食するほうが多かったなあ。先生のお話し上手があつてか、知らず知らずのうちに私たちは、いろんなことを思い出したりして、何十年か前の過去の世界にいた。そして湧き出る一つ一つの思いに耽る間もなく、一時間があつと過ぎてしまった。

それにしても、今回の大規模改築工事には驚く。三期六カ年にわたつての工事と聞くと、少子化・生徒減に反比例して、より大きく広々とした校舎になるように思った。あと二年、完成した新校舎を目にしたいものである。

第二限特別授業

講師 関戸信次先生

演題

「恐竜時代の化石が語るものは何か」

先生は今も大学で講義されていると伺っているが、長年研究を続けられている「化石物語」を拝聴することができた。先生のライフワークとも言ふべき、手取層群の化石との取り組みを、明治初期の発見から現代までの歴史的過程を織り交ぜながら、熱く語られた。私自身、しばらく仕事のこと、石川県に「自然史博物館」設立という方々に係わつたことがありましたが、そのとき先生もメンバーのお一人でした。先生の第一章

「石川県でもっとも古い地層に眠る物語」に始まり、第二章「物語を解き明かすための努力」、第三章「物語をどのように後世に伝えて行くか」、そして終章「誰でも利用できる自然史博物館」を聞いて、今更ながら先生のこれまでの努力に敬服し、また自然史への熱き思い、情熱をこれほどに感じたことはありませんでした。仕事であれ、趣味であれ、何をするにも精一杯の努力と情熱を持つこと、物凄さを教えて頂きました。このことは老若関係なく、人間として生きる力の源かな。

さて今回の特別授業でご講義頂いた、建部、関戸の両先生とも、私たち十四期生は、

高校時代直接教わる機会がありませんでした。私自身教育に係わつてきたことから、以前からご交誼いただき、またいろいろご教示いただいてきました。しかしこの日の両先生の楽しく、嬉しそうに講義される姿、いつまでも母校のことを心に持ちつづけられている姿に接することが

でき、「俺はこの学校に学べて本当に良かったなあ、幸せだなあ」とあらためて感じた。建部先生、関戸先生ありがとうございました。いつまでもお元気でいてください。さて、講義が終つた後、石田校長の案内で新校舎を見学したあと、運動場に沿つた「青空の小径」を語り合いながら歩を進めていくと、懐かしい校歌のメロディが聞こえてきた。そこは天守台下の特設懇親会場だった。ここまで用意していただいたのか、関係者にただただ感謝したい。さて、参加者全員揃つたところで、あらためて現役高校生による百周年記念の祝典序曲の吹奏楽演奏でとなつた。毎日通勤



関戸先生

の車の中で聞くCDと違い、生演奏ということもあつて、何とも表現し難い感動を覚えた。

この後懇親会をセシモニーに移り、吉田同窓会長の挨拶、石田校長の歓迎のことば、そして鏡割り、乾杯と続き、本日の第二部、楽しい野外昼食懇親会が開始された。校歌斉唱までの時間、普段の同窓会と違つた、園遊会的な、本当に楽しい懇親会であつた。またこの日を祝さんばかりの晴天に恵まれて、主催者、参加者一堂の普段の精進のご褒美と一人悦に入り、思ひ出し、「ああ、自分はなんと幸せなんだろう」と、しみじみ感傷に浸つた一時を過ごした。

最後になりましたが、休日にもかかわらず登校し、素晴らしい演奏を奏じてくれた後輩の皆さん、そして吉田同窓会会長、上出副会長、石田校長、その他この日のために、諸準備、お世話いただいた皆様に、心から感謝し、お礼を申し上げて筆を置きます。

(高校14回)

● 第4回
ホームスクール
カミングデイの予告
2004年
9月26日(日)
15回孕還暦・35回孕初老の方たちが中心で
31回孕の方がお世話係です。

第9回 関東小松同窓会開催

第9回 関東小松同窓会 幹事長

北森 友英



総会は白江治彦関東小松同窓会会長(高校八回)が「3年に一度のこのひとときを十分に楽しんでください」と挨拶。来賓を代表して寺本明夫関西小松同窓会会長(高校四回)より祝辞を戴いた。会計報告、役員承認のあと引き続き懇親会へと移った。

総会と懇親会とのわずかな時間を利用して「古里の今」を大スクリーンにて上映した。新築が進む母校の様子をはじめ現在の小松の様子、さらには同窓生の誰もが一度は訪れたであろう古里の懐かしい風景(郡谷寺・安宅の関等)も懐かしく映し出された。

特に小松駅周辺の変わりようには会場から歓声が上がった。この映像は同窓生(石川テレビ)の多大な協力のもと、無理なお願いを聞いていただいていたの試みであった。懐かしい矢原教育長のメッセージも心に残るものであった。

懇親会に移り、来賓を代表して吉田歳嗣小松同窓会会長(高校九回)・石田毅士郎校長よりの挨拶で母校の近況や新校舎が平成十八年に完成すること等が報告された。

乾杯のあと、東宝俳優の大川婦久美さん(高校二十六回)による



左より 白江 治彦会長、大川 婦久美さん(高26回)、北森 友英(高26回)

祝い舞いが披露されいよいよ懐かしい友とのタイムスリップがスタートした。

宴たけなわではあったが、「クイズイン小松」をスタートさせた。母校、古里に関する問題を準備し挑戦いただいた。(事前に流した「古里の今」のスライドの中にもいくつかのヒントや答えを準備した。)天守台の石段の数? ちよつと難しい問題もあったようだ。

さらに、お楽しみ抽選会。会場入り口で参加者全員にお配りした「宝くじ1枚」。これが抽選番号となり会場は沸きに沸いた。同窓生の皆さんを中心に数多くの商品を提供いただき古里の懐かしい品を

手にする笑顔が印象的だった。抽選会ラストのメインの品は人間国宝徳田八十吉氏がこの日の為に焼き上げていただいた逸品。大変幸運の持ち主へ当日わざわざご参加戴いた徳田氏ご本人より手渡された。

いよいよ懇親会もピークへ。同窓会では欠かせない校歌斉唱。400名の大合唱は会場をも揺るがさんばかりの響きであった。

「万歳、万歳、万歳」定刻4時30分。白江会長の3年後の再会を誓う締め挨拶と共に万歳三唱で会に幕を下ろした。なごりはいつまでも尽きず、懐かしい友との再会を誓い同窓生は会場を後にした。またお会いしましょう。(高校26回)



昨年11月に教育委員会の文化課主催の「ふるさと小松びと」に声を掛けていただき講演会をしました。教育長の矢原珠美手先生をはじめ井口哲郎先生、西畠匙先生ほか、なつかしい小松高校時代の恩師も足を運んで下さりして、また旧友、同窓生たちにも再会出来てうれしくも有り難い限りでありました。

小松駅前一帯が、すっかり変わっているのには驚きましたが、「ついで」という子供歌舞伎などに使えるホールが出来たりで、小松の伝統文化を発信・継承してゆける空間がまたあらたに誕生したのは、うれしい事です。

20世紀という時代は、近代化や開発経済、科学技術が優先されました。とにかく「新しい」とか「効率」「便利」といった側面が持てはやされましたが、21世紀は、伝統文化など古くから続いてきたものも、その価値や良さが、再認識・再評価され、フランスよく「スロー」なスタイルも本来の意味で見直されてくるでしょう。環境問題などと殊更声を荒げなくてもよい時代がこなくはなりません。「戦争」といったものも、じつは地球環境破壊の最たる悪かな行為です。

私は、文学や芸術といった、言語や身体という人間にとっては、太古から綿々と続いている究極のメディアでつくられた文化について勉強し、研究しております。「言葉」や「イ

メージ」無しでは、人は生きていけません。どうして何時の世にも人は「物語」や芝居、演劇、舞踊などを必要としているのだろうか、という根源的な問いが私のテーマなのです。

20世紀は、革命と戦争の世紀でもありました。文学や芸術もそうした波に翻弄されました。前衛(アヴァンギャルド)という言葉も、軍

海を渡ったカブキとハイク

高橋 世織



プロフィール

昭和26年生まれ。小松高校を経て早稲田大学博士課程修了。早稲田大学教授。
 大学ガイド「ブルータス」等の人気雑誌に掲載されるなど、学生から絶大な人気と高い評価を得ている。
 高橋ゼミからは、研究者、写真家、映画監督等有望な新人が多数輩出している。
 専門分野：近代日本文学、映像文化論、モダニズム研究等、従来の国文学の枠にとらわれず、言葉を身体論、言語表象論などの観点から探求している。

隊用語からの転用されたものです。小松は、勸進帳の「歌舞伎」や芭蕉の『おくの細道』もあつて「俳句」の盛んな土地柄です。この近世に発達発展した「歌舞伎」も「俳諧」も日本の誇るべき伝統文化ですが、日本以上に20世紀の20年代にヨーロッパの前衛芸術が、大きな評価をしてくれたものなのです。『イワ

ン雷帝』などの映画監督でもあり、モンタージュ理論を作ったロシアの巨匠イゼンシユティンは、「歌舞伎」の演劇理論から大変影響を受けました。「見栄を切る」作法が、「クローズアップ」手法を生んだりしたのです。1927年に二代目市川左團次らの歌舞伎一行がモスクワを訪れた時、一番の「追っかけ」はイゼンシユティンで、カツラ貰つて

歌舞伎衣装を纏った写真などが残されています。俳句も1920年のフランスの季刊文芸誌『NRF』で特集研究号が特集された程です。この雑誌は歴代の編集長がほとんどノーベル文学賞を受賞しています。1920年の「俳句」特集号の時の編集長は、20世紀を代表する詩人P・エリユア

ールでした。芭蕉や蕪村の俳句を向こうの文学者達が絵掛かりで評価、研究していたのです。まだ無名の若きイゼンシユティンも寄稿して、ハイクは映像言語であると喝破しています。

後に彼は、こんな事も言っています。最も前衛的な芸術は、最も封建的な時代のそれのすぐ隣にあって、一本のハチマキのようにお互い結び合わされるべきものです。前者は、トーキー映画という当時最先端の前衛テクノロジ―芸術を、後者は江戸徳川時代からの歌舞伎や俳句を夫々指していたのです。小松には、なんとこの歌舞伎も俳句も共にゆかりの深いところ。茶の湯や、伝統工芸など、世界に誇るべき宝の山を沢山もっているのです。国際化とは、自国の文化を良く知り尽くし、それを相対的に見極めることが出来ることなのだと思えます。

「いつい、職業柄、堅い話になってしまつて済みません。香箱蟹に舌鼓をうちました。大きな夕陽が日本海に沈み白山から加賀平野が夕陽に美しく染まる光景を久しぶりに見ました。宗教的な、仏教的なメンタリティがごく自然に湧出てくる感覚を体験出来ました。いつまでも、自然の懐に抱かれた小松の素晴らしさが続きますように。

(高校22回)

「いつしかに

八十路となりて

振り返る

呼べど答えぬ

級友ぞいとしき」

小松原 花子

女学校二年の砌、寺岡先生がお世話下さった「言苑」を今でも座右の辞書として重宝致して居ります。先日その本の最後を見ましたら定価三円（持価二円五十銭）となっており隔世の感が致しました。あの頃の授業料が五円でした。

父母がその金を稼ぐ為に夜から夜働いて下さった事を従妹から聞いたのは両親が亡くなられた後と後でした。それなのに何一つ報いる事のなかった自分を想い、母が私の為に体を毀されたと思うと何とお詫びしてよいか言葉もありません。それでも一言も愚痴を聞いた事もなく親の有難さを知るのが余りにも遅かったのです。本当に申し訳ない。

夏は安宅の浜へ堤防通りを通い唯でさえ黒いのが炎天下泳いでどんな凄惨な顔になってゐたか、姉が高松の臨海教育で十日間を過し帰省して居り「でっかい真

黒のめろんこが二人居るとひとにかなしさけ外へ出んといてくれ」と云われた母の気がわがわがります。でも假二級を戴き嬉しかった事を忘れません。

冬には串の丸山へスキーを担いで行つた事、修学旅行では父母の知らぬ土地を廻り楽しかった数々の想出は女学校へ出して戴いたお陰と今更乍ら感謝致して居ります。

話は変わりますが、葉桜の頃、青空の小径を天守台に行き白タンポポが珍しく眼をひきました。亡夫が中学の頃の事をよく話してくれました。天守台に蛇が居た事、運動会での教員レースの様子等、天守台を舞台に若き血を燃したであらう熱血漢を想い浮べ感無量でした。

六十一才で早逝した主人が自分の死を悟り「短い生涯であった」と云われた時には何と云つていいか苦しい想いをしました。「お前にもひどい世帯を持つて苦労をかけた」との一言がどんなに救われた事か、もう二十年も前の事です。御恩を受けた師の君亡き数に入られた級友は何人になられた事でしょう御冥福をお祈り致します。

(県女28回)

「あの師、あの友」

林 滋

平成10年、母校の創立百周年の前年が、私ども旧制中学46回生の卒業50周年にあつたので同窓会の理事が中心になつて記念誌の編集出版がされた。丁度30%の級友が亡くなつていたが、そのことに驚くよりはもつと驚いたのは、それと同数が県外に出ていたことである。結局この県内で死んで行くのは40%しかない訳なのであるから急に淋しくなつた。学制改革で新制高校になつた時に、商・工・農と県女・市女が「小松高校」になり、「小松同窓会」でも、それぞれの校歌が交換されるのがしきたりになつた。やがて旧態に復しても、卒業生にとっては自分の歴史だから年2回の総会の雰囲気にはひたることを恒としていたのだが、高校卒業生も50回を超える「間借人」のようでは肩身が狭くなつて来た。

その微候は数年前からあつて、会場の座席が中央最前列に近付いていたのだが、昨年とうとう指定席に加わる事になつてのはシヨックだつた。そしてメンバーが少なくなつた市女の校歌も聞かれなくなつた。兄弟3人子供夫婦2組が同級生で、孫と一緒に同窓会のメンバー入り

夢だつたが、この分では本當の夢になりかねない。親子二代教師も、同級生校長も昔語りの様になつたし、残念だがせめては「命ある限り」、「天守台」への送稿で、歴史と伝統を繋ぎに行きたいと思つているこの頃である。(中学46回)

小松高校生に望む

喜多一

高校にたいする感想としては、中谷宇吉郎先生の小松中学に対する思いが、「詰め込み学習でおもしろくなかつた。」とあつたと思ひますが、先生の博識はこの中学時代を含めてのこの辺からの英才教育によるところと思ひてなりません。高校生は才能があつてもつばみもつばみ、将来どこで花を咲かせるにしてもこの知識はどうしても身につける必要があると思ふものほしつかり学習しておいてほしいと思ひます。

大学は今までの知識をじっくりと再考しながら拡大するところ、大学の先取りは私としては必要ないと思ひます。高校は時間的制約もあり、悠長に構えてはいけません。小松高校生には今の知識は将来、必ず自己を築く基礎になるとの認識と自信をもつてほしいと思ひます。

(高校24回)

2003年度 クラブ活動記録

●陸上では 鈴木雄介君大活躍!

- 鈴木雄介 県高校新人大会5,000m競歩 1位
- 北陸地域選手権大会5,000m競歩 1位
- 全日本競歩根上大会10km競歩 1位
- 全日本高校総体5,000m競歩 2位
- 日本ジュニア選手権大会1万m競歩 2位
- 佐野夏希 県総体女子800m 1位
- 北信越総体女子800m 2位
- 佐々木美里 県高校新人大会 100mハードル 1位
- “ 砲丸投・円盤投 2位
- 県総体 砲丸投・円盤投 共に 2位
- 石田 健 県ナイター陸上大会100m 1位
- “ 400m 1位
- 県高校新人大会 200m 2位
- 中村孝行 県高校新人大会 100m 2位
- チーム(中村、石田、西航平、中西栄樹)
- 県高校新人大会1600mリレー 1位

甲子園、都大路はあと1歩!

県高校駅伝大会 男子6位 女子5位

●野球

全国高校野球選手権石川県予選 ベスト8

●バレーボール

加賀地区高校大会 男子1位 女子3位

●ハンドボール

県総体女子 3位(北信越大会出場)
県高校新人大会 女子 ベスト8

●テニス

- 県総体 男子団体 ベスト8
- 女子団体 3位(北信越大会出場)
- 男子ダブルス 2位(渡辺北斗・渡辺勇斗)
- 女子ダブルス 2位(伴・北村組)
- 加賀地区高校ダブルス大会 男子1位(窪田・堀口組)
- “ 女子1位(鹿島・角谷組)

伝統のボート部も大善戦!

●ボート

- 県総体 男子舵手付クオドルブル
- 優勝(インターハイ出場)
- 男子シングルスカル
- 2位 荻畑裕紀(北信越大会出場)
- 女子舵手付クオドルブル
- 優勝(インターハイ出場)
- 新人大会 男子ダブルスカル
- 1位(中部選抜大会出場)
- 男子シングルスカル
- 1位 荻畑裕紀(中部選抜大会出場)

山岳、初のインターハイ出場!

●山岳

- 県総体 男子団体
- 優勝(本校初のインターハイ出場)
- 北信越総体 男子団体 優秀校

●カヌー

- 県総体 男子k-2
- 2位山田哲郎・新村翼(北信越大会出場)
- 総合2位
- 北信越総体 男子k-1
- 2位山田哲郎(インターハイ出場)
- 県高校新人大会 男子総合2位

●弓道

- 県総体 女子個人
- 優勝 吉田真友美(インターハイ出場)
- 加賀地区高校大会 男子団体 準優勝
- 男子個人 優勝 中山督
- 県高校新人大会 男子団体 準優勝
- 女子団体 準優勝

●バドミントン

- 県総体 女子団体 ベスト8
- 県高校根上大会 女子 ベスト8
- 県高校新人大会 女子 ベスト8

●空手

- 県総体 個人組手試合 準優勝 吉田京平
- 県高校新人大会 個人形試合
- 優勝 吉田京平
- 2位 子坂英史

●ボクシング

- 県総体 ライトウェルター級
- 準優勝 伊藤正暁(北信越大会出場)

文化部

●放送

- 全国高校放送コンテスト県大会 朗読部入選 浜口恵
- 番組制作部門(ラジオドキュメント) 優良賞
- 県高校放送コンテスト新人大会 朗読の部優秀賞 浜口恵
- 県高校放送作品コンクール第2部門(録音構成) 優秀賞

●かるた

- 県かるた大会 団体優勝(全国総文大会出場)
- 全国高校小倉百人一首かるた選手権大会
- 個人戦D級3位 湊佐穂里
- 県高校かるた選手権大会 1部有段者の部
- 優勝 織部智子

小松高校創立104周年記念講演会 日野皓正氏を迎えて開催

小林 朋子



2003年10月3日、小松高校創立記念の講演会が世界的ジャズトランペッター日野皓正氏を迎えて、同校体育館で行われた。これは、私達国際ソロプチミスト小松の事業の一つとして、Sクラ

「我が人生」と題して講演され、生徒たちに「僕は中学までしかいっていません、だからみなさんが羨ましいです。」と切りだし、ジャズの歴史や自らの人生を振り返りながら、時には即興演奏をま

ブという地域の青少年奉仕活動を推進し奨励する活動があります。小松高校の全生徒を対象にSクラブスポンサー認証5周年の記念事業として日野皓正氏を招聘し、実現したものです。

夜は小松市公会堂で市民を対象に同氏の演奏会を行い、満員の客がジャズに酔いしれたひとときを過ごしました。ありがとうございました。

(高校9回)

『小松市史』の 資料収集にご協力を

井口 哲郎

私はいま『小松市史(資料編)文芸』の編纂を手伝っています。文芸部会の委員長は大西勉さん(中41)で、委員の中には金戸隆幸さん(中46)や、清水郁夫さん(高6)もいます。

金戸さんと私は、「現代の文芸活動を担当しています。明治以降、文芸活動をした小松ゆかりの人を取り上げ、その経歴や、活動・著作を収録したいと思っています。」

その人選の対象は、「小松ゆかりの人」ですから、小松同窓会の会員なら、小松市外の人でも市内に入ります。「資料編」に残したい人がありましたら、推薦してほしいと思います。

また、文芸関係の出版物も、できるだけ広く紹介したいと、市民からの情報をお願いしています。会員の皆さんも自薦・他薦を問わず、ぜひご協力をお願いします。ただ紹介するものは、市民が作品を手にとつて読めるように、著作物を小松市立図書館にご寄贈いただくことを条件にしたいと考えています。

右の情報の提供は、平成十六年八月末日までに、小松市立図書館市史編纂室 内文芸部会宛て(〒923-0903 小松市丸の内公園町19)をお願いします。会員の皆様のご協力をお待ちしています。

(高校3回)

編集室だより

◇新年あけましておめでとうございます。本年も会員の声や同窓会活動の紹介、学校の現状など楽しい誌面を作りたいと思いますので、ご協力の程よろしくお願いします。

○本誌(天守台)を送付ご希望の方は、郵送料として1000円を同窓会事務局までお送り下さい。五年間(十回分)お送りさせていただきます。

第28号の原稿募集

- ◎発行 平成16年7月
- ◎送先 小松市丸の内町二の丸15 小松同窓会事務局宛
- ◎内容 自由(在学中の思い出、同期の催し、近況報告など)
- ◎送先 〒923-18646 小松市丸の内町二の丸15 小松同窓会事務局宛

「天守台」編集委員会

- 委員長 宮西 勉夫(高校9回)
- 委員 安田 進一郎(中学45回)
- 委員 浜野 光代(県女35回)
- 委員 野田 洋子(高校12回)
- 委員 杉永 信幸(高校18回)
- 委員 池田 幸夫(高校32回)
- 委員 山口 和博(高校34回)

同窓会事務局

- 学校職員 村井 恭子(高校34回)
- 学校職員 村 戸 徹(高校33回)
- 学校職員 森 都 古
- 学校職員 奥野 洋子